

八雲紫のおっばいを揉
ませてもらうために土
下座する話

織葉 黎旺

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトル通りでした。

※2020/04/23

何故か続きました。

目次

八雲紫のおっぱいを揉ませてもらうために土下座する話	1
八雲紫のふとももに埋まるために土下寝する話	7
八雲紫の帽子を貰うために正座する話	12
八雲紫の手袋を脱がせるために一肌ぬぐ話	15
八雲紫のファッションを真似るために出自を伺う話	21
八雲紫に煙管を持たせて記念撮影する話	26
八雲紫のスキマに仕舞ってもらうためにお辞儀する話	33
八雲紫と相合傘するために雨乞いする話	37
八雲紫にASMRしてもらうために差し入れする話	43

八雲紫のおっぱいを揉ませてもらうために土下座する話

「お願いします！」

膝を折り、地に頭を擦り付けるようにして腰を落とす。それは俗に言う土下座の体勢だった。それを見て、向かい合っている女性は、嘆息する。

「頭を上げてくださいな」

知的で品のある綺麗な声。しかし、俺は顔を上げない。

「いいえ、俺は頼み事をしてるんです。物を頼む立場として、この姿勢を崩すことは出来ないです」

「大の大人が往来で、衆前に痴態を晒しながら何を頼むというの？」

そう、ここは往来であつた。正確に言えば人里のお団子屋の表の食事スペース。その赤い椅子に座る彼女——八雲紫に向かって、俺は土下座していた。

「貴方にしか頼めないことなんです」

「……ええ、まあ友人の頼みですし、私に出来る範囲であれば無碍にはしませんわ」

俺の真剣な様子に押されたのか、紫はゆっくり頷いた。

「ありがとう」

「!? え、ええ」

感謝の気持ちを込めて飛び着き、手を握ると、突然の行動に驚いたのか、聡明な紫にしては珍しく動揺しているようだった。寒いからか、頬が赤みを帯びて見える。

「まだ力になれるか分からないのだから、お礼を言われても困るわ」

「あ、そうですね。早とちりしちやつてすいません」

「……で、頼みごとつて何かしら?」

「はい。おっぱいを揉ませてほしいんです」

ドゴオツ、という盛大な音が頭上に響いた。頭上というか頭中までゴングゴングワングワンと響いてきた。グラグラする視界の中で周りを見ると、ヒビの入ったお地蔵さんが倒れていた。

「いったあ……なんて罰当たりなことを……」

「ごめんなさいね、私としたことが手を滑らせてしまったわ。ついでに頼み事も聞き逃してしまつたみたいだから、もう一度言つてくださる?」

「年ですか?」

サツ、と横に回避。元いた場所に今度は要石が降つてきた。危ない危ない。素早く姿勢を正して（土下座に直つて）元氣よく言った。

「お願いします! おっぱいを揉ませてください!!」

言い終わるが刹那、俺の体は宙に吹き飛ばされた。見ると、スキマから飛び出した古びた列車が俺の体に直撃しているのだった。殺意が見えるな、と思いながら衝撃をいなし、一回転して着地する。

「いきなり何するんですかあ!」

「それは私の台詞よ!」

「まだ何もしてませんよっ!」

「これからしようとしてるでしよう!?!」

「え、させてもらえるんですか!?!」

バチン、といい音が響いた。ピンタだった。すごく痛かった。紫の顔は、恐らく俺の今の頬と同じくらい赤かった。

「そ、そもそも何でいきなりそんなこと……」

紫は未だかつて見たことがないほど動揺している様子だった。俺は真っ直ぐ紫を見て叫ぶ。

「好きだからです!」

「ええっ!?!」

「おっばい!!」

ドゴオツ、とほつぺたに拳がめり込んで殴り飛ばされる。それは少女にあるまじき力

であり、大妖怪の風格を感じさせる力量だった。ただ、様子が様子なので威厳みたいなものは全くなかった。紫は、こちらを睨みながら言う。

「そんなに好きなら彼女にでも頼みなさい……!」

「嫌です、俺は紫ちゃんのおっぱいだから触りたいんだ、揉みたいんだ、あれこれしたいんだ!! そもそも彼女いないし!!」

「……ッ!」

足元に浮遊感。スキマが開いたらしい。無抵抗のまま落下すると、畳の上に出た。もしやここは八雲家だろうか。

「ということは、その気になってくれたんですね!」

「違うわよ、道端であんな話をして辱められたくなかっただけ!」

「なあんだ」

「露骨に嫌そうな顔しないで頂戴、それ私がしたい顔だから」

「違います、これは抑えきれない悲しみに嫌気が差して呆れた顔です」

「ほとんど同じじゃない」

紫さんは呆れ顔だった。俺と同じですね、と言いたかったが怒られそうなのでやめた。

「そもそも、その……そういうのは、親しい男女が時間をかけてゆっくりと踏み切ってい

く行為だと思っただけだ……」

「俺たちももう、十分親しい間柄じゃないですか！」

「男女の仲ではないじゃない」

「わかりました。じゃあ男女の仲になりましょう！ 付き合ってください!!」

「下心が見え見えなのでお断りしますわ」

「下心のない告白なんてこの世の中には存在しないんですよ。告白する男はみんなおっぱいのことだけ考えてます」

「今の私は貴方との友人関係をどう解消するかだけ考えているわ」

「なるほど、解消して恋人に……イエ、ナンデモナイデス」

ジトーツ、とした目で睨んでくる彼女を見て、失敗だったかなあと内心で頭を抱える。いきなり付き合って、と頼むのはハードルが高いから、おっぱいから入れば敷居が下がっていけるかなと思っただけだ。むしろ嫌われてしまったかもしれない、やってしまったなあ、と頭をポリポリ掻いた。

「紫さん」

「何よ」

「これからも——友達でいてくれますか？」

紫さんはきよとん、とした顔をした。今日はこの人の珍しい表情をたくさん見られて

いる。

「さあ、私にはわかりませんわ」

いつものような胡散臭い感じではなく、ぶっきらぼうで冷たい感じに彼女は言った。

「だって——関係の境界なんて、誰にもどうなるかわからないもの」

進むにせよ、戻るにせよ——

「——え、つまり期待していいってことですか？　ですよね？」

「ご想像にお任せしますわ」

照れてるのか何なのか、紫は扇子で口元を隠した。無論俺は、前者だと解釈する。

「よーし、散歩にでも行きますか！」

「あら、浪漫のないデートプランですこと」

「紫さんと行くのなら、何処だって最高のデートスポットですよ」

キザすぎるわね、と紫は笑った。その笑みはやけに胡散臭くて、とても美しいのだった。

八雲紫のふとももに埋まるために土下寝する話

「お願いします!!」

平身低頭。文字通りその姿勢で、俺は叫ぶ。対して相手の女性は、呆れ返ったように深く嘆息した。

「頭を上げてくださいいな。そのままじゃ話しづらいでしょう」

「いえ、結構です!!」

「遠慮しないで。ものを頼むときの態度だとか礼節だとかは、私たちの間には不要よ?」
「いえ、この姿勢じゃなきゃいけないんです! この姿勢のままじゃなければいけないんです!!」

深く息を吸う。空気が変わったのを察してか、紫さんがごくりと唾を飲む音が聞こえた。

「お願いします!! 俺の頭を太ももで挟んでください!!!」

「……………は?」

フリーズ。返答は一向に返ってこない。これはもしや聞こえていなかったのかな、もしくは姿勢が間違ってたのかな、という結論に至り、地面に伏して再び叫ぶ。

「お願いします!! 俺の頭を、御御足で挟んでくださいませ!!!」

「お、お断りしますわ!」

後頭部に痛み。否、コンマ数秒ごとに強まっていくこの負荷、それに前頭部と後頭部に間を空けてかかる曲線と真円の感触。間違いない、俺は今ヒールで踏まれている。しかしこのままだと頭蓋骨が陥没してしまうので、大きく横転して立ち上がった。そして再び頭を下げた。

「お願いします、太ももに埋めてください!」

「……意味がわからないわ」

ちらりと視線を上げる。紫の目は過去一番と言つていいほどレベルの冷ややかさを誇っていた。口元は扇子で隠し、その妖怪じみた眼力だけを俺に向けてくる。見定めるとような見下すような、侮蔑するような軽蔑するような目。返答を誤れば殺す、と訴えているようにも感じた。

「意味はわかるでしょう。俺が紫さんの太ももに魅力を感じていたということですよ」

「それはわかるわ。だとしても、それを本人に堂々と提案してくるのは常識を逸脱した行為ではなくて?」

「はい、そこでこちらを用意致しました」

「……おわ」

指を鳴らす。暗くなる室内。前面のモニターに、事前に作成しておいたパワー○イントの内容が映し出される。タイトルは「八雲紫の太ももに付随する魅力、またそれに挟まれることにより生じるメリットについて」。

「えー、それではまず八雲紫氏の太ももに付随する魅力についてご説明致したいと思ひます」

取り出した伊達眼鏡をくいと上げる。紫が微妙な顔をした。

「①八雲紫の太腿は普段、ドレスや導師服の面積によつて隠されています。しかしその裏側に、程よい筋肉と脂肪で覆われた、プロポーション抜群の曲線美と云つて差し支えない太ももがあるのは俺知の事実

②更にいえばその服の裏側であっても、白タイツにより覆われている。つまり蒸れ」「蒸れないわよ、汗かかないから！ 妖怪だし！」

「えー」

「残念そうな顔しないで、それしたいの私だから」

心底疲れた顔をする紫を見て、これはどうにか俺が癒してあげなければと使命感に駆られる。そのため次のパワポである。

「それでは八雲紫の太ももに挟まれるメリットについて説明します。①俺がめっちゃくちゃ気持ちいい!!」

「……………」

控えめに言つて死ねばいいのにみたいな表情だった。

「②他人との肉体的接触やボディタッチでストレスが和らぎ、幸せ物質であるオキシトシンが分泌され、多幸感や満足感を得られるのは科学的に実証されている事実です。そして日々のストレスに咽び泣く我々がそれを行うのはいわば医療行為です。治療の一貫です。だからさあ！ 今こそ!!」

「今こそ！ じゃないわよ！」

妖怪の賢者による貴重なノリツツコミ、そしてチョップを受けた。痛かった。

「そもそも、軽度のスキンシップでもいいのだから太ももで挟む必要はないでしょう？」

「え、じゃあハグですか!？」

「変なところに抱きつかれそうだからお断りしますわ」

にっこりとした胡散臭い笑顔。変なところってどこだろうか、皆目見当もつかない。

「それなら……手を繋いでもらってもいいですか？」

「そのくらいなら、まあ」

接地面積は広い方がいいはずなので、指は絡める。ドキドキする。折角モニターがあるので映画でも見ましようか、と提案してみる。体の奥がバクバクする。

「何を見ようか？」

「貴方にお任せするわ」

迷ったら恥だと思つて適当に選んだ。上映が始まる、指先の温もりが気になって、内容なんて微塵も頭に入つてこない。小つ恥ずかしくて、隣なんて向けやしない。でも、この映画が終わらなきやいいのにな、なんて少しだけ思う昼下がりがだった。

八雲紫の帽子を貰うために正座する話

「お願いがあります」

それまでの楽な姿勢と、声音を正しての一言。談笑していた彼女も雰囲気が変わったのを察してか、「何かしら」と、真面目な顔つきで返す。

「……いただきたいんです」

「？」

「紫さんの帽子を、いただきたいんです」

「少々お待ちくださいいな」

少しだけ訝しげな表情をした紫は、スキマの中に手を突っ込む。そこから引つ張り出した、大きな赤いリボンのついた帽子を、俺の方に投げた。

「これでいいかしら？」

「……………ち」

「？」

「ちが—————う!!!!」

帽子を優しく抱えて、必死に叫ぶ。何が違うんだ、と言わんばかりの眼をして、紫は

こちらを睨んだ。なのでそのまま答えることにする。

「確かにそれは紫さんの帽子でしょう。何日かのサイクルで被り回す、貴女のお気に入りの帽子だ。でも俺が今求めているのはそれじゃない。貴女が今身に着けている帽子そのものだ。紫自身の生の証だ」

また始まった。そう語らんばかりの怪訝な顔で、紫は嘆息した。そこに胡散臭さは欠片もない。心底からの呆れが見える。が、そんなことは知ったことではない。最早相槌を打つのも億劫そうな紫に対し、畳みかけるように俺は言葉を放つ。

「洗濯されたピカピカのものなんていらぬ。洗練された宝石が、貴婦人の胸元でこそ輝くように、紫の帽子は、紫の頭上にあるからこそ魅力的なんだ」

「それなら渡したら意味がなくなるんじゃないかしら？」

「黙らっしゃい！ 三秒ルー尔的なアレでセーフなんですよ！ 紫さんが一度被った後なら永続的に魅力的なの！」

はあ、と一息吐く。ヒートアップし過ぎたので喉を痛めた。紅葉の山の中、綺麗な景色に勝るとも劣らない優雅さで歩く紫から目を逸らし、咳払いした。

「活動時間が違うし、種族が違うし、お互いそこそこ忙しいし、いつもいつでも会えるわけじゃないじゃん。だからほら、会えなくても繋がりを感じたというか何というか……ああもう！ とにかく帽子ください！」

「はい」

ぽふっ、と頭に柔らかいものが被さった。目の前の彼女は、夕陽に当てられたロング
ブロンドを煌めかせ、いつも通り胡散臭く笑う。

「似合わないわね」

「うるせえ」

そりやそうだ。この帽子は、貴女が被るからこそ似合うんだ。ぽんぽんと頭を撫でられたのが悔しくて、恥ずかしくて、でもちよつとだけ嬉しくて、照れ隠しに帽子を深く被る。ついでに大きく息を吸う。シャンプーだろうか、旬の果実のような甘い香りがして、思わずクラリとした。原因は恐らく、頬を林檎にした紫の、頭頂部へのチョップだった。

八雲紫の手袋を脱がせるために一肌ぬぐ話

「もし、そこのお姉さん」

「はい?」

夏でも雨でもないのに日傘を刺した金髪の女は、問いかけに振り返る。濡れた瞳の見返り美人である。

「何か御用かしら?」

「うん、まあちよつと」

煮え切らない態度に彼女は眉を顰める。「いつもみたいにくだらないうことなら行くわよ」というので、ちよつと待てと呼び止める。

「アンタ、最近悪いことあつたでしょう」

「ついさつきからその通りね」

「……あー、それはよくない兆候だ。よし、俺が占つてしんぜよう!」

「いえ、結構よ」

「そこをなんとか!!」

平然と俺を置いていきかけた紫の手を握り、必死に引き止める。訝しげな瞳の紫は立ち止まって、「まあ話くらいは聞いてあげますわ」と言った。小さなテーブルの置かれた、近くの椅子に促し、向かい合う形で座る。

「ずっと黙ってたけど俺、手相見れるんですよ」

「妖怪だから、手相とかあんまり関係ないわよ？」

「ある!! 気分とか変わるでしょ!! 気持ちよくしてあげるから!!!」

「適当言う気満々じゃない」

バレてしまった。だがここまできたら押し通すしかない。

「まあまあ、お団子あげますから」

「その程度で妖怪の賢者が釣れると思ってるなら、酷く心外だわ」

なんて嘆息しつつも彼女は、三色団子を串から外し、どこからか取りだしたお箸でもきゅもきゅと食べ始めた。一個ください、と言ったら微妙な顔をされた。

「さて、それじゃあ手袋を外してください」

「ええ——いえ、ちよつと待って」

手袋に手をかけた紫は、動きを止めた。焦りを悟られないように、どうしました、と落ち着いて言う。

「何か企んでいるでしょう?」

「何のことでしょう」

「手を握る……いいえ、違うわね。これまでの傾向を見るに、手袋そのものが目的……？」

「まずい。北極星が北斗七星に飲まれるまでの時間すら瞬時に導き出すという賢者の頭脳が、この状況そのものを疑い始めている。顎に添えられた手を、ガシツと掴む。

「紫さん！ 信じてください！」

「きやあつー！」

悲鳴をあげながら普通に振り払われた。俺の心がショックで沈んでいく。絹のような滑らかな感触だけが手に残って——残——

「残つとるやん!!」

そう。俺の手の中には、彼女の手袋が残っていた。どうやら振り払われた勢いで抜けてしまったらしい。危うくノリツツコミしながら地面に叩きつけるところだった。目的を達成したからには話が早い。

「ちおおおおおおお!!」

「?!?!」

「手袋を広げ、顔へと近づけて大きく呼吸する。洗剤と香水と少しの汗が混じって、熟れすぎた果実みたいな香りがする。もう一度吸おうとしたら、手袋ごと顔が陥没した。

第三宇宙速度で後方へ吹き飛ぶ。水切りの要領で身体が跳ねる。

「痛あ、何するんですかあ!!!」

「最低」

柔らかくて華奢なお手手の割に拳は重かったとか、手袋がなかったから直に触れたとか、そんな思考を吹き飛ばす軽蔑の視線がこちらを突き刺す。多分このままだったら、『惨たらしく残酷にこの大地から去ね!』とか言われる。それどころか無言で消される可能性すらある。妖怪の賢者はそれだけの力を持っているのである。が、俺は力には屈しない。

「紫さん」

「なんででしょう」

「ご馳走様でした」

「それはそれは、本当にお粗末さまでした」

倒れ込む俺に近づいてきた彼女は、ゆっくりと俺に馬乗りになる。不覚にもドキドキする。優しく手を握った後、大将首を獲った武士よろしく、勢いよく天に掲げられた。ゴキリと肩が外れる音がした。

「いたたたたた!!! まってまって、人体はそんな風には曲がらないから!!!」
「細工とかじゃないから!!!」

「私も手相、見れるのよ」

俺の悲鳴は無視して、彼女は淡々と話す。スキマから妙に持ち手が細い虫眼鏡を取り出して、難しそうな顔で俺の手を見る。

「ふむ……これはよろしくないわね」

「な、なにが、でしょうか」

「死相が出ていますわ」

死相。死にそう。殺されそう。

「でも大丈夫、手相なんて簡単に変えられます」

「えっ」

手のひらに何か刺さった。差し跡は熱を帯びて、たらりと血潮を漏らす。赤くなつた虫眼鏡の柄を、紫がちろりと舐めた。

「抗えぬ運命なら、書き換えればいいだけのことですわ」

一点の曇りもない、妖怪じみた静かな微笑。生命線を伸ばしてもらえればいいなあ、なんて思った。

「今際の際に、一つだけお願いがあります」

「何かしら」

「俺が死んだら、面布の代わりに手袋でお願いしていいですか？」

顔面を勢いよく手袋が直撃した。

八雲紫のファッションを真似るために出自を伺う話

「お願いします」

頭を下げると、長年の経験からか、彼女は大変嫌そうな顔をした。

「嫌ですわ」

口に出された。お願いする前に断られた。

「や、今日はマジで大丈夫です。安心してください、紫さんに害はないので」

「私の衣服を取られるのは、四肢をもがれるほどに苦しいことなのよ？」

「嘘泣きやめてください」

よよよ、と扇子で顔半分を覆つての泣き真似。うん、つまりそこまで不機嫌じゃないな。あと、人を追い剥ぎみたいに言うのはやめていただきたい。

「お願いします！」

斜め45度、キレイなお辞儀で、キレイな心で頼む。小さく咳払いした紫が「何かしら」と聞き返す。

「お願いします！ その服の出处、教えてください！」

*

八雲紫の服装は、一年を通して大変珍しいものとなっている。まず、暖かくなつてきた春から晩夏にかけてはドレス。このドレスというのも、サツマイモと見紛うほど鮮やかな紫に染め上げられた上、フリフリとリボンの散りばめられた少女趣味の、なかなか見ないものであり、それにナイトキャップみたいな例の帽子だとか白手袋白ニーハイソックスとか、組み合わせのセンスがまあ大変珍しい。新宿なんかを歩いた日には多分、十人が十人振り返つて變つて言う。溶け込めるのはハロウインの渋谷程度である。しかも秋先にはデザイン變更して布地の面積を増やすし、リボンやフリルの量を増やし、それに応じて微妙に容姿を幼くする。なんだその拘りは。

秋から冬にかけての服も珍しい。中国の導師みたいな服装つてことはわかるけど、それにしてはドレスのフリフリの量がえぐいし、前掛けも何か違うデザインになつてる気がするし、変なデザインの太極図が描かれてるし、何もわからん。なに？ 洋風のドレスと中華風の導師服でバランス取つてるの？ 太極図つてそういうことなの？

—— 閑話休題。

「つまり俺が何を言いたいのかといえ、その謎センスと謎デザインが羨ましくて堪らないので、同じようなものをくださいってことです」

「今話を聞いたあとで差し上げると思う？」

笑顔から圧を感じる。つまり不機嫌のサインだ。

「何故ですか、俺はちゃんと気に入ってるんですよ！ その意味不明なセンスを！」
「私も私のセンスが気に入ってるから真似されたくないのよ」

どうにもぐらかされている気がする。

「なら、同じメーカーの別の商品を買うので販売元を教えてください」

「プライベートブランドへのオーダーメイドだから、それは難しいわね」

「……紫さん、その服いつから愛用してましたっけ？」

「結構前からかしら」

ここで俺の脳内コンピュータが電卓を叩き始める。既に数千年生きている大妖怪・八雲紫の基準でいえば、最近〓ここ数十年、ちよつと前〓数百年、結構前〓千年くらい前、という方程式が成立するッ！

「中国で導師が多かった時代も恐らくそのくらい……ということは今！ 点と点が繋がったッ！ 紫さん、導師服をパクって自分で裁断しましたね!？」

「アレンジですわ」

パクリじゃなくてオマージュよ、とウィンクして続ける紫さん。なるほど、ならもう話が早い。

「お願いします！ 俺に服を作ってください!!」

「お断りします」

普通に断られた。

「幻想郷の管理者に呉服屋の真似事をさせる気？」

「はい。最悪製作は委託でもいいので！」

「そういう問題じゃないのよね」

呆れるように言われると、なんだかムツとしてくる。俺はあんたにとつて、自分の力を割くに値しない存在なのか、と言いたくなってくるが、そりやまあそうだろつて感じだった。身銭を切れば変わるだろうか。委託するとしたらどこだろうか、やっぱり藍さんだろうか。

ん、とここで気づく。

「藍さんと紫さんの冬服、デザイン似てますよね」

「まあ、そうね」

「もしかして、あの服も紫さんがデザインしたんですか？」

「——ノーコメントよ」

これはもう間違いない、と思った。

「え——、ならいいじゃないですか！ 絶対橙の服も考えたでしょ！ そこまで来たら俺の服もほら！ さあ！」

「はいはい、考えておくわ」

絶対考えてないでしょ、なんて返せば、はぐらかすように笑われた。そんな夕方的一幕だった。

八雲紫に煙管を持たせて記念撮影する話

「暇ですか？」

「それなりには」

縁側で彼女が、お団子と満月を見比べている。俺に割く程度の時間はあるらしいので、とりあえず隣に座る。月が綺麗ですねとは言わない。

「ならお願いがあります」

「変なのだったら折るわよ？」

「話の腰を？」

「首を」

なるほど。手首か乳首だったらいいなと甘い希望を抱いておくことにする。まあ今回はそんな事態にはならないと思うが。

「本当に些細なお願いなんで、流石に大丈夫だと思えます」

「前科があるから信用できませんが、いいでしょう」

紫宝瞳アメジストがこちらを見つめる。相手を見つめるのは話す時のマナーとはいえ、月より見る価値があると値踏みされたような気がして、何だか胸を張りたくなった。

「お願いします！　これ、持ってみてください！」
「これは——キセルね」

——煙管キセル。煙草を嗜む時に使う道具の一種。全体的には細長く、先に丸く窪まった火皿が付いていて、そこに刻んだ煙草を乗せ、熱することで喫煙するためのモノ。まあ現代においてはメジャーではないが、意外と目にすることは多いので、わざわざ説明しなくとも知っている人は多いと思う。

「貴方喫煙者だったかしら？」

「いや？　喘息持ちだから絶対吸えない」

「どうして持っていたのよ」

「そりゃあ紫さんに持ってもらいたかったからさ、買ったんだよ」

現代でメジャーではないということは、つまり幻想郷にはそこそこ流入してきているということの裏返しであり、入手も容易で価格もまあまあだった。ちなみに、人里ではむしろ紙巻き煙草の方が少ないとか。

買ったという言葉を受けて、紫の表情は何だか引き気味のそれに変わっていた。

「え、ちよつと待って。俺今回そんなやばいお願いしてないですよね？　軽く煙管持ってみてくれてお願いしてるだけですよね？」

「吸いもせずに小道具としての為だけに買うのは、中々に性的嗜好フェティシズムを感じてしまいわ」

中々の言われようである。日頃積み重ねた信頼度が垣間見える。

まあ、コレクシヨンの意味合いで一本くらい欲しかったので、ある種ちようどいい機会でもあつた。

「いいでしょう」

と紫が頷いた時、持っていたはずの煙管は既に彼女の手の中で弄ばれており、いつもの胡散臭い笑みを浮かべていた。

「ありがとうございます！ んじゃ、月をバックにそれっぽいポーズをお願いします」
「だいたい雑な要求ね」

そう言いつつも紫は、どこか慣れた手つきで右手に煙管を持ち、吹かした後とも吹かす前とも取れるような位置取りで、こちらを見つめた。うん、やはり煙管には導師服の方が合う。香霖堂で買ったインスタントカメラを取り出して、とりあえず一枚パシャリ。

「……なんか違う」

満月、ススキ、美女、煙管。要素は強いのだが、何かアクセントが足りない。むう、と煙管と睨めっこして、欲しかったモノに気づいた。

「あー、煙だ！ やっぱ煙管からは紫煙が昇ってなきや！」

こんなこともあるのかと一応抱き合わせで買っていた刻み煙草を火皿に突っ込む。マツチを擦って点火して、軽く吹かしてみても思いつきり咳き込んだ。

「何をやっているのよ」

「ゴホッゴホッ！ いや、こうしないとちゃんと煙出ないじゃないですか！」

眉を顰めつつも、困ったように微笑んでいる彼女が綺麗だったので、とりあえず一枚撮った。シャッターチャンスは逃さないのが敏腕カメラマンなのだ。

「さ、じゃあこれ持ってポーピングしてください。ミロのヴェーナスもかくやって感じのやつを」

「それ、キセル持てないけどいいのかしら？」

少しだけ前掲姿勢になって、紫は片手を顎に軽く当てる。思慮を深めるような難しい表情から察するに、恐らく彫刻繋がり『考える人』だろう。そのまますぎると流石にキツイからか、結構浅めの体勢ではあるが。

「あーいいい！ すつこくいいすよー」

褒めながら一枚撮ると、紫はどうだと言わんばかりに不敵に笑って、煙管を顔に寄せた。ほんのりと煙草の香りがしたが、普段嗅ぐような鼻に残るようなイヤな匂いではなくて、少し爽やかで芳しい感じがした。

「あら、煙が」

時間が経って煙草の燃焼が落ち着いてきてしまったためか、煙が弱まっていた。彼女は唇を吸い口につけ、深く息を吸い、艶やかに多量の紫煙を吐いた。

「……………ち……………」

「？」

「ちが——う——！！！！」

俺の叫び声が月夜に響く。心底うんざりした顔の紫が、何が違うのよと本当は聞きたくなさそうに聞いた。

「煙管は持つてるからいいんです！ 吸っちゃったらもうそれはただのヤニカスじゃないですかあ！！」

「でも吸わなきゃ煙が立たないじゃない」

「いいんですよ、それは俺がやるんで！」

「……………喘息持ちの貴方に、負担をかけさせないようという判断だったのだけれど——いけなかったかしら」

瞳を濡らし、しゅんとしおらしい様子でこちらを見つめる紫。俺を氣遣っていたなんて、そう言われてしまうともう、「ごめん」と謝る他ない。

「ふつ、わかればいいのよ」

そう言いつつ彼女はもう一服。してやったりというニヤケ顔を見るに、さては謀つたな。

「卑怯つすよ、それは。心配してくれたのかと思つて不覚にも喜んじやつたじゃないですか」

「心配していたのは本当ですわ。誤魔化す口実にさせてもらつただけで」

「吸いたかつたんすね！」

「いえ、まあそれほどは」

酒は好めど、煙にはあまり愛着が芽生えなかつたらしい。俺が似合う似合うと褒めそやしたものだから、少しばかり興味を持たせてしまったのだろうか。

「……それにしたつて様になりすぎだぜ」

「貴方だつて、あと数百年すれば煙の似合う男になりますわ」

「それももう死んでるじゃないですか。燻らすのは煙管つてより火葬の煙ですよもう」

「骨は拾つてあげるわ、つまみ食いしちゃうかもしれないけれど」

「煮ても焼いても食えないもんでね、お腹壊しちゃうかもしれないですけど」

そのときは。

「しよっぱい水で味付けて、よく噛み締めてくださいや」

「気取りすぎね」

昇っていった。彼女がもう一度だけ、深く息を吸った。煙がもくもくと、満月を内包した星空へと

八雲紫のスキマに仕舞ってもらうためにお辞儀する話

「お願いします」

きつかり90度、身体を倒してお辞儀する。眼の前の彼女は訝しげに「貴方が改まるときはロクでもない話が来ると相場が決まっているのだけれど」と嘆息した。

「まあ聞きましょう。頭を上げなさいな」

「うん」

言われたとおりにそうする。少し肌寒くなってきたからと、ドレスではなく導師服に身を包んだ彼女が、縁側でお茶を啜っていた。まあ今回は大したことないし通るだろ、と軽い気持ちで叫ぶ。

「お願いします！ 俺をスキマの中にしまってください!!」

「……………」

絶句、あるいは唾然といった表情。この表情は新パターンだな、と他人事のように思っている。ずらずと母屋の方に後退られた。

「え、どうしたの?」

「ちよっと近づかないでくださるかしら、その分離なきやいけなくなるから」

「それならほら、スキマの中に突っ込んでくれれば一石二鳥だよ。姿見えなくなるし俺嬉しいし、ほらウィンウィン」

「貴方の一人勝ちじゃない」

紫はそういつて小首を傾げた。

「今日のは今までで一番意味がわからないのだけれど、一体どういうこと?」

「おや。北極星がナンタラカンタラに食われるまでの時間すら秒で計算できるといふ紫ちゃんにすら、わからないとは」

「狂人の思考は時として理解しがたいもの」

「はー仕方ない、ここはいっちょよご教授いたしましょう」

「いえ、遠慮しておくわ」

「まあまあ、そう遠慮なさらず。これを聞いたらきつと、俺をスキマに入れたくなること間違いありませんよ?」

「幻想郷から弾き出したくなること間違いなしではなくて?」

俺はゴソゴソと、懐から漫画を取り出す。

「これ、『ぼのぼの』っていう漫画なんですけど」

「もう何も言わなくていいわ」

理解までが早い。どうやら紫さんのスパコン並の頭脳はもう答えを弾き出したらし

いが、間違っていることなので、答え合わせと洒落込む。

「この中に『しまつちやうおじさん』ってキャラがいるじゃないですか。主人公のぼのぼのの妄想がネガティブな方向に進んでいったときに脳内に現れて、謎の洞窟の岩戸に押し込んでくるやつ」

『悪い子はどうんどうしまつちやおうね〜』のかけごとともに、涙を流すぼのぼのを暗闇の中に閉じ込めるところで毎回妄想は終わる。しまつちやうおじさん自体のキャラクタ―デザインや音声には何も恐ろしいところがない故に、むしろその異常さというか、淡々とした恐怖が演出されている。でもそんなことはどうでもよくて。

「閉所に閉じ込められて要は監禁じゃないですか。恐ろしいじゃないですか。だから思っただですよ、スキマに監禁されたいなあ……って」

「理論が一気に三段くらい飛んだわね」

「ヤンデレ、燃えるじゃないですか」

「病んでるわよ、普通に」

貴方が。と大事な一文が足された。

「いやいや失礼な。俺だつて暗い洞窟に一人閉じ込められるのは嫌です。でもスキマなら紫さんの能力の中なワケで、まあつまるところ常に紫さんと共にいるような一体感

と、包まれているような安心感が——」

「常人なら発狂したくなる空間なはずだけれど」

紫が宙をなぞれば、ジツパーが開くように空間が裂けていき、紫色の空間に繋がるとともにリボンで両端が止められた。スキマである。その内部ではギョロギョロと無数の大きな目が蠢いており、その中の一つと目が合ったのでゆつくりと瞬きをした。動物などに相対したときはこれで敵意がないことを伝えられるらしい。

「狂人だものね、貴方は」

「いやいやそんな強靱だなんて——凶太いだけですよ」

「本当にそうですわ」

「どちらかといえば、紫さんにズブズブです」

「心の隙間には入らないでほしいわね」

彼女が呆れたように言う。それができないからこうしているということは、黙っておくことにした。

八雲紫と相合傘するために雨乞いする話

「えんやつさーほいやつさー」

「何をやっているんだ」

白装束でお祓い棒を持ち、マヨヒガで適当に踊ってたら、訝しげな顔をした藍さんが現れた。

「や、これは、そのですね……」

まさかいるとは思わなかったので、普通に恥ずかしい。が、まあ藍さんならいいかと真実を話す。

「いま、俺は雨乞いをしています」

「雨乞い……？ それは何故」

「そりゃあ勿論、紫さんと相合傘したいからですよ!!」

「ああ……お前はそういう男だったな」

聞いた私が馬鹿だった、と言わんばかりの溜息が聞こえてきた。むしろアンタの主のこことをこれだけ想っているのだから、喜んでほしい。

「心がけは立派だが、本気で雨乞いがしたいのなら、巫女である霊夢にでも頼めばよかつ

たんじやないか？」

「……………！」

「気づかなかったのか…………」

哀れみの視線を感じる。本職に頼まず、民間療法的な雨乞い（謎の踊りと無数のふれふれ坊主）に頼ったのは間違いだったか。っていうか、守矢の神様にでもお願いしてくればよかった。

「うわー、無駄な努力した〜」

「そんなに雨を降らせたいなら、ひとついい方法がある」
「？」

ニヤリと、何かイイコトを思いついた時特有の笑顔を浮かべて、俺の手を引いた。

*

「やあ、どうも紫さん」

「マヨヒガは、人がそう簡単に来るところではないのだけれど」

「まあまあまあ。俺は人生とか、恋の迷路だとかに迷い続けている男ですから」

何を言っているんだと言わんばかりの、胡散臭いお手上げのジェスチャーを示して、

彼女は「それで？ 迷った結果そんな堅苦しい和服になったのかしら？」と俺の服を指さして揶揄った。

「ああ、それはほら。礼儀というか、形式なので」

沈黙。聡明な彼女が一切何も反応しない時は、言葉の意味を咀嚼し、意図を読み取るうとしているサインだ。

「またせたな」

「いえいえ、ちようどいいところですよ」

紫の瞳孔が開く。閉じる。口が小さく開く。閉じる。なんとというか、検算しているよ
うな顔だった。

「紫様。わざわざご足労いただきありがとうございます」

紫の手元にある手紙を一瞥して、藍さんは微笑む。

「いえ、それはいいのだけれど……一体これは？」

「はい、結婚式です」

「けっ——結婚？」

お、珍しい反応。撮っておけばよかった。

「はい、ちよつと彼と結婚しようと思ひまして。ということで紫様、仲人お願いします」

「わかつたわ」

その一言で動揺をおくびにも出さないようになり、速やかに結納の進行を行ったのは流石大妖怪といったところか。しかしその代償か、式が終わる頃には紫の顔には見るからに疲労の色が映っていた。

「結婚おめでとう。私は、少し風に当たってくるわ」

「あ、紫さん！」

スタスタと歩き出した彼女を引き留めようとしたところ、藍さんに肩を掴まれ首を振られる。まだ焦らせ、と。なるほど。いい性格をしている。

「……………」

「あ、ようやく見つけた」

木漏れ日の差す林道の間。いつもの傘を差してすたすた歩く彼女に声をかければ立

ち止まつて、こちらに少し振り向く。

「あら、ただの散歩なのだから着いてくることないのに。貴方は藍のところにおいてあげなさいな」

「いえいえ、大丈夫ですよ。目的は無事達したので」

ほら、そろそろですよ——そう言つて、彼女の腕を引く。

「何が——」

——ぱら、ぱら、と。ノックするような雨音が聞こえた。

「——ああ、そういうこと」

「そう。狐の嫁入りです」

抜けるような青空。そこに点在する雲から、まばらに雨が傘を叩く。比例するように強まってくる。彼女の腕を取り、傘に潜り込む。

「こんなことのために、藍に協力してもらつたの?」

「いえ、むしろあの人の提案つすよ。俺はあくまで共犯です」

狐の嫁入りとは、言うまでもなく天気雨のことで、これが見える日には不思議な嫁入り行列が見えるとか何とかそんな言い伝えがあるが、格式高い九尾の狐である八雲藍の嫁入りともなれば、それは百発百中で起きる。ということ、下手な雨乞いよりも余程効果的な雨降らしに協力してもらつたのだ。

「もしかして、ちょっと寂しくなりました？」

「いえ、むしろせいせいしていたところよ」

凜とした横顔、胡散臭い笑顔。そんな彼女の頬に、そっと雨水が伝った。

八雲紫にASMRしてもらうために差し入れする話

「お久しぶりです、紫さん」

「ええ、お久しぶり。しばらく見なかったから、どこかの妖怪に食べられちゃったのかと思っていたわ」

「いやあ、俺は紫さん以外には食べられませんよ」

「お腹を壊しそうだから遠慮しておきたいわね」

「あ！ 人を毒物みたいに言ってる！」

久々にやってきたマヨヒガの縁側で、スキマから顔を出した紫とそんなくだらない話で談笑する。

彼女はここに住んでいる訳ではないのだが、俺がここに来ると境界の揺らぎみたいな物が伝わるらしくて、彼女に会いたい時の待ち合わせ場所として活用している。

いや、本音を言えば毎日会いに来たいが。

「そうだ。これ、お土産です」

「あら、珍しい。明日は雪かしら」

「もう春ですよ」

だからこんなにポカポカだし、だから久しぶりなのだ。毎度の事とはいえ、彼女が冬眠している冬の期間は寂しくて堪らなかった。来年こそは一緒に冬眠させてほしい。

「人里で有名なお菓子屋さんのお煎餅でございます」

「いいセンスじゃない」

素直に褒めてくれた辺り、ちゃんと彼女のお眼鏡に叶ったらしい。ラッキー、それから一石二鳥である。

「ささ、早速お召し上がりください。いまお茶も淹れてきますからね」

「気が利くわね」

心なしか上機嫌の紫を見て、本日の勝利を確信する。

井戸水を汲み、古びた薬缶やかんに注ぎ、ライターで薪に着火して湯が沸くのを待つ。

そこそこのいい茶葉を用意して、鼻歌を歌うこと数分。お茶完成。熱々の湯呑みを手に縁側へ向かう。紫は、割れた煎餅を片手に俺を待っていた。

「ありがとう。丁度いいタイミングだわ」

「あー！ なんで先に食べちゃったんですか！」

「貴方が早速お召し上がりください、って言ったんじゃない」

そういえばそうだった。俺、痛恨のミスである。貴重な一口目を聞き逃すとは。

まあいいですけど、と言って、湯気がもうもうと立つお茶を啜りながら、彼女の手元

を見る。煎餅は口元に徐々に近づいていき、そして——パリツと子気味のいい破壊音を響かせる前に、止まった。

「え？ た、食べないんですか？」

「それはこちらの台詞よ。持ってきた割に食べないのね」

「先にお茶が飲みたくて……」

「いつもは猫舌だからと茶請けを先に食べるでしょう？」

「たまにはそういう気分の時もあります」

「その割に羨ましそうに——いいえ、違うわね。羨望というより期待、私に煎餅を食べさせることが目的……？」

まずい。紫のスパコン並の頭脳が、俺の浅はかな考えを見透かそうとしている。

「何か入れるならお茶の方でしょうから、お煎餅である可能性が高いわね。でもこれは個包装だし、特に細工がされていた経験もなかった……」

「そ、そんなに疑います!？」

「何より、貴方の態度がどことなく変だったもの。そう——いつも何か、変なお願いをしてくる時みたいに」

「!」

「そう考えると、私に何かをさせることが狙い——お煎餅を食べさせること? いいえ、

少し違うわね。私が一口食べる瞬間に居合わせたかったということは、食べている姿を見ること或いは食べている音を聞くことが目的かしら。後者なら、お煎餅というチョイスも納得だものね」

「……はあ」

思わず溜息を吐く。とんだ安楽椅子探偵である。そこまで言い当てられてしまえば、もう誤魔化す必要もない。

「流石ですね、すべて正解です。俺は今日、紫さんにASMRしてもらうためにお煎餅を買ってきました」

「……？」

紫は眉をへの字にして、小首を傾げた。

「何の略語かしら？」

「
です」
の略

「成程、聴覚や視覚への刺激によって快感反応を得るということね。言い方が癪だけれど」

「そこがいいじゃないですか」

概要は理解して貰えたらしいが、感覚まで理解してもらっているかは怪しい。あくま

で彼女は妖怪であり、いくら共に同じ物を味わい、喋ろうが、感覚のすべてが同じ訳ではないのだから。

「言いたいことは分かるわ。お煎餅を噛んだ時の、パリツと子気味のいい破砕音——アレを聞きたいってことよね？」

「その通りです！」

「まあ、その程度であれば構わないでしょう」

「やたっ！」

初めてまともに要求が通った気がする。ガッツポーズと共に「いつでもどうぞ！」とその時を待つ。

「じゃあ、いただきます」

「はいっ！」

紫の華奢な手が煎餅に伸び、そして口へと向かう。西日がキラキラと照らす彼女の姿を目に焼き付け、訪れるその瞬間を——その快音を待つ。

——パリツ、ガリツ、ボリツ。

「あ~~~~たまん」

「その情けない顔で此方を見ないでもらえるかしら？」

「もうその冷たい囁きすら気持ちいいですからね」

「一個刺激がやってくると、もう脳全体がそのモードになる身体になってしまったのだ。しかし一つの刺激程度で満足する俺ではない。」

「あ、もちよいい音立てて気味でお願いしていいですか？ 時々お茶啜るのも挟む感じで飲み切ったあとは湯呑みをタツピングしてほしいんですが——」

「良い音が欲しいなら、丁度よく碎けそうな骨が二百六個もあるじゃない？」

「いやっ、たぶん音より先に声が出ちやうかも……ッ！」

「いいじゃない。良い声で鳴くのよ？」

「ちよっ、人体はそっちには曲がら……あああああああ……!!?!?!」

「この日以来、俺はASMRを見る頻度を減らした。!!?!?!」